

## 第28号

(2015年4月8日発行)

発行:中央大学学会 出版白門会

## CONTENTS

(お名前は敬称略)

- ▽2015年新年会報告
- ▽学員交歓
- ▽出版白門会の関連行事予定
- ▽濱 嘉之 氏 新春講演「執筆活動と危機管理」
- ▽出版界・白門同窓の輪…小宮 仁
- ▽出版白門会「能楽鑑賞会」の雅な世界に初参加…高木 浩行
- ▽「働くこと入門」講義を終えて…北村 信治
- ▽多摩美術大学美術館で「空海の時代」に思いを馳せる…丹田 公和
- ▽告知板
- ▽編集後記

## 出版白門会の関連行事予定

- ①地図を通して知る東京  
「田端文士村会館と文士旧宅邸のまち歩き」  
5月17日(日)13時30分～  
田端駅北口改札口前集合  
※詳細が決まり次第、会員メールでご案内します。
- ②第16回定期総会と懇親会  
7月29日(水)18時30分～  
会場:日本出版クラブ会館2Fさくら  
※後日、出欠確認を兼ねたご案内をお送りします。
- ③会報発行 10月1日予定
- ④箱根駅伝予選会応援  
※詳細が決まり次第、次回会報でご案内いたします。
- ⑤第15回能楽鑑賞会  
12月12日(土)/12時開場、13時開演  
会場:国立能楽堂(渋谷区千駄ヶ谷4-18-1)/JR千駄ヶ谷駅より徒歩5分  
演能曲:「殺生石(せつしょうせき)/白頭(はくとう)・演者「片山九郎右衛門(観世流)」  
狂言:「鶏聲(にわとりむこ)/古式(こしき)」  
演者「茂山良暢(大蔵流)」  
※「申し込み方法」「内容詳細」は10月発行予定の第29号会報に同封する、申し込みチラシをご覧ください。

■行事に係わるお問合せは、下記メールでご連絡ください。

E-mail:pub.hakumon@gmail.com

なお、上記行事のほか、「オンデマンド出版・先端技術見学会」など皆さまの仕事に役立つ企画、あるいは懇親の企画を検討中です。

## 学員交歓

■出版白門会の、今後の方針の一つは他の学員会支部との交流促進です。その事が支部相互の活性化にいざさかでも寄与すればと考えています。以下は、最近の他支部との交流の報告です。

- ♣ 2014年9月28日、白門57ネット主催の「江戸落語を楽しむ会」に出版白門会員5名が参加。中大OBの真打落語家、桂やまと師匠の講演を中大記念館で楽しんだ後の懇親会で、57ネット(浜田会長)の皆様、学員交流委員会・権守委員長、白門48会佐藤幹事長、桂やまと師匠等と懇親を深める。なお、この会がご縁で、57ネット会員でもある、作家の濱嘉之氏に本年の出版白門新春講演会の講師をお願いした。
- ♣ 1月3日、箱根駅伝応援後、有楽町「東天紅」における白門57ネット主催の合同懇親会に出版白門会員5名が参加。同会に参加していた白門1984会(林支部長)の皆様とも親睦を深める。なお、この会に参加していた、こみや書店の小宮仁氏には、今回の会報のインタビューにご協力をいただく。
- ♣ 1月23日の出版白門会新年会に57ネットから5名の皆様に参加。講演会、懇親会、2次会において親しく交流した。(前掲写真参照)

## 出版白門

<http://pub-hakumon.jimdo.com/>

● 出版界に出版白門の知恵と情熱を! ●

## 2015年新年会報告

1月23日、東京・新宿区の日本出版クラブ会館において37名の会員の出席のもと、新年会が開催された。第一部は作家の濱嘉之氏を講師に迎え「執筆活動と危機管理」と題し、警視庁時代に担当した「あの事件」の裏側から、危機管理コンサルティング会社を立上げ、国会議員秘書を経て、物書きに手を染めた経過、そして11月に出版された『オメガⅡ 対中工作』(講談社文庫)、最新刊の『電光石火』(文春文庫)の執筆背景まで、ユーモアを交えた、貴重な話を伺った。会場では、新作2点の販売、即席サイン会も行われ、すべて完売する程の盛況であった。

第二部の懇親会は濱田会長の開会挨拶に続き、朝妻副会長の乾杯でス

タートした。歓談後、今回、講師の濱氏がメンバーである縁で参加戴いた年次支部「白門57ネット」の浜田会長以下5名が登壇し、挨拶と支部交流のエールを戴いた。また、昨年12月に、北村広報委員が、八王子キャンパスで行った商学部総合講座「働くこと入門講座」の中で行った告知を聞き、参加してくれた学生2名のうち、文学部の古寺さんから、緊張しながらも先輩諸兄にリスペクトあふれる挨拶があった。

続いて、恒例の新春ビンゴ大会、吉例の土屋事業委員長のアカペラ指導による校歌の大合唱、最後に雨谷理事の中締めで名残を残しつつお開きとなった。



懇親会場にて



ゲスト参加の「白門57ネット」の皆さん



サイン中の濱氏



「桂やまと落語会」後の懇親会



箱根駅伝応援後の57ネットとの合同懇親会

出版白門会ホームページアドレス <http://pub-hakumon.jimdo.com/>

facebook 出版白門会サイトへのアクセスは検索サイトの「出版白門会(中央大学学員会職域支部)」から…

## 濱 嘉之 氏 新春講演会「執筆活動と危機管理」

恒例の出版白門会の新春講演会、今年は講師に1982年法学部卒の小説家、濱嘉之氏をお迎えした。

2007年に単行本で作家デビューした濱氏が、本格的な執筆活動に入ったのは4年2か月前からだということだが、この間発行した文庫は16冊、売り上げは累計160万部を超えるという堂々たる実績を残している。

講演は、同氏が年末に行ってきた元気がなっているアメリカの話題から入り、今日の大きな課題「欧州の1兆ユーロを超える量的緩和」「イスラム国の身代金問題」(注:講演会の時点ではまだ身代金が要求された段階)を、同氏が別途仕事としている「リスクマネジメント」の観点から分析。その中で同氏は、最低限の経済学と最低限の世界史を知っておかないと危機管理はできないと強調。日本の政治家が失言問題で高い代償を払われている一番の問題は世界史を知らないからと述べた。

「これだけの借金がありながらコケない日本」「蓄財をあまりやらず、借金をしながら生活しているアメリカ人」「欧州の1兆ユーロの放出が世界経済に及ぼす影響」等、経済学から見る危機管理、そして世界史からとらえるイスラムの危機管理問題に言及した。

イスラムの世界では多数派のスニー派の一部が、なぜあのように過激になっていくのか。紀元1,000年代には紫式部のような女流作家が活躍していた日本と比較し、国民の半分である女性に教育を施さず、その結果、母親は子供に教育ができないというようなバックグラウンドを見ておくと自ずと答えが出てくると説く。歴史を重んじる中東はこれまで歴史がある日本に好意的だったが、今回のイスラム国のように、初めて日本を敵視するところが出てきたことも今後の新たな危機管理の問題として提起した。

本題に入り、まず同氏の小説の源泉である、そのユニークな経歴が語られた。

大学卒業後警視庁に入り、22年半務め途中でやめたが、その間、あちこちに行かされた。行くところ、行くところが忙しくなった。機動隊に行った時は昭和天皇がお亡くなりになった。警備一課では即位の礼の警備計画を立て、昼134人、夜50数人と言う最高警備本部で12万人の警察官を動かさねばならなかった。宮沢政権末期に警部補で内閣情報調査室へ。宮沢、細川、羽田、村山政権の内閣官房では、国内政事を担当する。その後、警視庁公安部に戻ると、宗教とマスコミ担当。この時にオウム真理教事件が起きた。公安の後、成城警察

に行き、そこで起こったのが世田谷一家殺人事件だった。この事件について同氏は「不幸なことが重なった事件で、12月31日発覚という、警視庁が一年のうちで一番弱体な時に起こった」とその舞台裏を話した。退職するまで「いろんなところでいろんな世界を見ることができた。特に内閣情報調査室では政官財の裏の世界、表の世界、マスコミ、宗教団体と言うものを見てきた。内部で言えばキャリアとノンキャリアとの差なども実際を目で見てきた。これらの経験が結果的には危機管理になった」という。

このような経歴の中で培った豊富な人脈も作家となってから大きな力となったようだ。その一人で「電子の標的」の書評を書いてくれた元内閣危機管理監で現在官僚のトップである内閣官房副長官の杉田和博氏の「彼はバリバリの情報マンであった」という評価が、濱氏の警察人生のすべてであり、警察小説を書いても文句を言われたい所だという。在籍した公安部については、「小説の中では常に悪役だが、決してそうではない。公安というのは事件が起こったからおしまい。起こる前に潰す。オール or ナッシングの世界」と語った。

警視庁を退職後、危機管理に係る会社を作る。その中で、国会議員のマネジメントを頼まれ、国家試験を受け政策秘書となった。ここでは地方の予算の取り合等で地方と国家の関係が見えてきたという。

濱氏によって語られる経歴・経験は一般人にほとんど縁がない世界であり、同氏の小説が興味を持って多くの人に読まれる所以なのだろう。

続いて、A4、3枚以上の文を書いたことがなかった濱氏が、原稿(小説)を書くようになったきっかけが語られる。

政策秘書当時、ある出版社から頼まれて少年犯罪の提言書のような原稿を書いた。少年事件課当時に本の発行に係った事が縁で入ってきた話だった。これが本になり講談社が出してくれた。その本の出版を祝ってくれた編集者から、その席で「小説、書けるんじゃないの」と言われる。「警察物か学校ものか、病院ものしか書けないよ」と言う、「みんな売れるよ。でもやっぱり警察物がいいんじゃないの」と言う。「情報物しか書けない」と言う「書いてみれば」と言われる。これが正に小説家としてのスタートだったと振り返る。そして西荻窪から千葉県の八千代までの通勤電車の中で3ヶ月で書き上げたのが『警視庁情報官』。単行本で6刷りまでいった。3冊目の『電子の標的』は新潮社から出版。因みにこの本はドラマ化が決まり、3月にクランクインとの事。単行本5冊を書いた後

は、文庫書下ろしという形で書いてきた。読者が知りたいであろうことを書くが、危機管理のこともあり、「これは誰だ」と分かってもらえない。とはいえ、

ばかげたことは書かない。ディテールは崩さない。警察組織であったり、内部の様子であったりは事実に基づき、先方の理解を得た上で書いていると、執筆にあたっての濱氏のスタンスが語られる。講演では他にも作者の危機管理に対する姿勢が良く表れたエピソードを聞くことができた。例えば、単行本で新潮社から出した『電子の標的』を文庫化する時は、新潮社を断り講談社から出しているが、これは、当時、新潮社から出していた他の作家のベストセラー本の巻末に協力者として列記された現職公安マン4人が、その後受けた仕打ちを知り、配慮がない編集(編集者)に問題を感じたからだと言う。最新刊の『電光石火』についても、執筆前に官邸を訪問し、内容に関係する人々には仁義を通したという。

危機管理に関連し、孫子の「兵法」の「兵とは詭道なり」に言及し、詭道を念頭に政治をウォッチして、危機管理の目で見たいと先は見えてくると述べた後、新刊『オメガ』と『電光石火』に話が及んだ。中国大使館から嫌われるほど、中国の隅々まで自分の足で歩いて集めた情報から見えてくる中国の実態。相手のことを勉強していない国会議員は兵法の国、中国にはやられてしまう。国内有事に対応するのがメインの危機管理官はいても対外的な問題が起きた時に対処する機関が日本にはなく、日本も諜報機関が必要だ、といった思いで書いたのが「オメガ」であり「対中工作」であるとの事。最新刊の『電光石火』では、官邸の中の記述は、外部から狙われる可能性もあることから、詳細な記述はしていないが、ある程度ファンサービスは必要であると濱氏は思っている。この虚実皮膜、情報の出し方が作家濱嘉之の技の見せどころのようである。

今ほど官房長官が注目されている時はないという濱氏の、このような面白い政治情勢を背景にして、危機管理と言うものを念頭に置き、今後ともいろんな形で日本を取り上げていきたいとの決意表明で講演は終わった。濱氏の引き出しには、スリリングな題材がまだまだ一杯詰まっているに違はなく、今後の活躍が楽しみである。



講演中の濱嘉之氏

■今回は都内上板橋で書店を経営している小宮仁さんにお話を伺いました。

—どのような大学生活でしたか?—

家業の書店を登校前と下校後に手伝いながら、上板橋から多摩まで毎日通っていました。今考えると大変ですが、新宿から京王線の特急に乗るとすぐという感じだったので、当時はそんなに苦にはなりません。店に入らない商品を大学の生協で買って店で売ったりしたこともありましたね。「くるみクラブ」というラグビーのクラブチームに入っていました。

—卒業後の進路は?—

そのまま家業の書店の仕事に就きました。父が店の方、私が外回りの営業と言う風に棲み分け、お客様の開拓に努めました。数字になるまで数年かかりました。

—こみや書店さんについて教えてください—

昭和39年に父が、それまでやっていた日本蕎麦屋から転業し創業しました。自社ビルの中の20坪店で、子供からお年寄りまで、地域のいろんな層の方がお客様です。雑誌を近隣のパーマ家さん、歯医者さん、喫茶店、企業に配達したりもしている地域密着の書店です。百科事典全集が飛ぶように売れた時代

もあったと聞いています。

—出版業界は厳しい状況が続いていますが、貴店はいかがですか?—

街の本屋の主力売り上げであった、雑誌とマンガが売れなくなっていて、店の売り上げは毎年どんどん落ちていきますので、その分を外売でカバーしなければなりません。学校へは細かい納品も含め、金額も様々ですが30校位に納品しています。教科書納品校は12校です。私立は大学受験などに力を入れていますので、景気に関係なく安定的な売り上げがあります。区立図書館へは板橋組合から納品しています。

—同業者さんの集まりではどのような話が多く出ますか?—

売り上げが良くないので、暗い話ばかりです。自前のビルで商売している駅前等の本屋さんは自分で商売をやるより、人に貸した方が確実に収入があるので、書店をやめる人が多いです。(この地域の書店も)かつての半分以上になりました。

—街の本屋さんにとっての悩みは何でしょうか?—

小さい店には売れ筋の本、欲しい本が思うように入ってきて来ません。どうやって本を仕入れるか頭を悩ませています。どうしても欲しい本、必要な本は出荷

手数料が別途かかる倉庫から取り寄せないと確実に入荷しません。

—業界団体ではどのようなことをやっていますか?また、書店業界の課題は?—

東京都書店商業組合青年部や板橋の青年部の役員として、色んな事をやりました。その青年部も若い人がなくなっています。また、本屋をこれからやろうという人も少なくなってきています。本屋をやりたいと思った人も、開業するための諸条件のハードルが高く、あきらめる人が多いと聞きます。また、出版社さんが倒産すると、店にある在庫は返品ができず書店がかぶることになります。

—街の本屋さんとして望むことは?—

街の本屋が今後どうなっていくのか、どうしていかなければならないのか想像もつきませんが、願望は、客注や、自分の店の棚を作るのに欲しい売れ筋書籍が、大手書店みたいに平積みができたらと思います。同じ土俵に立てれば顧客を逃がすことは無いのではないかと考えています。



### 書店数・規模の推移

- ①書店数：21,654店(2000年)→13,736店(2014年11月/アルメディア調べ)  
 ※うち、売場店舗を持つ書店は推計12,550店(2014年)  
 ※「日書連」加盟組合員数…9,406法人(2000年)/「白書出版産業」より→4,224法人(2014年)
- ②売り場面積：書店の店舗規模が大型化しているため、売場面積は増加。  
 ※全書店の11%である約1,400店舗弱の300坪以上の書店の面積占有率は、全売り場面積の約30%。

### 出版白門会「能楽鑑賞会」の雅な世界に初参加

高木 浩行

国立能楽堂という雅(みやび)な世界へ、妻君とともに初参加。始まる前の演目紹介では見所や背景まで解説。また個人モニターによる場面ごとの説明など、初心者でもわかりやすく、時間の過ぎるのも忘れる充実度。

狂言は「叔母ヶ酒」。酒をふるまおうとしない叔母に対し、鬼に化けておどかし酒にありつく場面にて「これはいい!我が家でも早即応用を」と思うも、すでに我が家には鬼より怖い妻が君

臨!ふと妻の横顔を見ると「酔っぱらいは昔も今も同じねえ」ときつい一言が。

能はすごいね!演目の「安達ヶ原」とは怖い話ですが、1m四方の布の囲いが場面により鬼の住む家となり、設定変わると鬼の寝所となる。観客に場を想像させ、イメージを膨らませる「無」から「無限」の創出舞台です。

能楽鑑賞後、先輩諸氏の解説でさらに能・狂言への興味がわいてきました。

来年も参加を楽しみにします。つきることのない、演劇3時間&宴6時間の充実した秋の午後でした。感謝!



## 「働くこと入門」講義を終えて

北村信治 (平成7年法学部卒)

昨年の12月17日(水)15時~多摩キャンパス8304教室にて商学部「総合講座・働くこと入門」で講義を担当しました。

出版白門会からは過去において講談社の森様、羊土社の一戸様が講義されており、私で3人目となりました。「情報・出版業界を代表して働くことの意義」を学生に伝えて欲しいとの大学からのオファーでした。オファーから



講義まで構想一年でした。出版不況→学生が出版業界を敬遠→出版白門会に若手が入らない…という負のスパイラルを打開できるか正直不安ではありました。

講義の内容は「情報社会における専門出版社の役割」~営業職としてわかったこと。学習目標は①出版業界の今を知る②アナログ(紙媒体)とデジタル媒体(電子書籍)を知る③売上高の15%を知る④文系から医学を知る⑤出版業界で働くために、としました。活字離れ、書籍離れと呼ばれて久しい世の中、学生の興味や視点が現在どこにあるか?あるとしたら「電子書籍」に向いているのか?など講義中に学生に数回質問をしましたが…そこは今の学生、無反応で

した。「一方通行の受動的な講義は意味が無いから、間違っても良いから能動的に授業に参加しよう!」と伝えました。授業中は無反応でも後日頂いた「講義レポート」を読んでみると「電子書籍を積極的に出版している企業に関心あります」「今までの受動的な考えから能動的な視点で授業に参加し就職活動に役立てたい」「業界の裏の話が聞けて視野が広がった」…と、書けば立派な答えが書ける後輩達でした。校風から大人しい学生が多いようですが、声を出して自分の意見を言えるような人になって、欲を言えば一人でも多くの後輩がこの出版業界に進んでもらえれば嬉しいです。

## 多摩美術大学美術館で「空海の時代」に思いを馳せる

1月11日、加藤守氏企画の表記美術館での土佐の仏教美術展鑑賞と講演会に、会員5名が参加した。講演会は「祈りの道へー四国遍路と土佐のほとけー」と題された展覧会の関連イベントで、シリーズの最終回「空海の時代ーその歴史と造形ー」。講師は早稲田大学名誉教授の大橋一章先生。

30分前に入場した定員200名ほどの会場は既に満席で立錫の余地もない。最終的に席を詰め込み250名ほどになった。このテーマの人気振りを再認識させられる。

大橋先生の講演は全く学者先生の講義調ではなく、538年の仏教公伝から835年の空海の入定まで、そして中国、朝鮮半島、長安から平城京、平安京、高野山、高知の海と山へと時空を超えた博学多識に裏打ち

されたスケールの大きい話はロマンに満ち、2時間が短くらいだった。

百済経由で仏教を取り入れた、文字もなかった日本での最初の漢字の達人聖徳太子の時代、千人くらいの僧侶がいたという東大寺の大仏供養、四隻で出発しても一隻帰ってくれば良いといった、命がけで唐に文化を学びに行った空海たち、その唐で最高の成績を収めた空海、聖なる世界を追求する最澄、聖俗併せて受容する懐深い空海の密教の話へと、次々に展開される多彩な話は聞く者の想像力を掻き立て、悠久の往時に誘う。

仏教美術史が専門の先生の曼荼羅に関する話も興味深い。曼荼羅は一種の平面的なデザインであるが、その曼荼羅を立体化し

たものが京都・東寺講堂の諸仏の配置であり、更にスケールが大きくなると高野山全体が、そして四国全体が曼荼羅になっているという。まるで宇宙からの視点だ。

当日、美術館に展示された土佐の仏像は120点余。講演会の後のギャラリートークでは、学芸員による個性あふれる仏像の他、出品作品の由来が熱っぽく語られた。

美術館を出た後は、近くの京王プラザラウンジで飲みながらの談論風発の語らい。ついには白石先生を囲んでの句会に及び、当日の企画のシメらしく、これも楽しく、勉強になりました。(丹田)

(参加者:朝妻,加藤,白石,丹田,利根川)

## 告知欄

## ■大学生の読書推進に会員のアイデアを…

今年度の活動方針に「読書推進活動」を掲げており、この出版不況の中、大学生の読書推進に役買う事ができないかと、検討を行っております。生協で中大出身作家のフェア、講演会、リーフレット配布などの案が出ていますが、読書の秋に向け、詳細を詰めて行きます。会員の皆様からもアイデアを募集しておりますので、よろしくお願いします。

## ■中大の歴史を動画で見ませんか

中大の歴史を動画で公開しています。以下の手順でアクセスしてみてください。  
※中大公式ホームページ⇒トップページの最下段にあるスライドメニューから、「白門ムービー」をクリック⇒歴史をクリック⇒「中央大学の歴史」や「駿河台の記憶」等のメニューから選んでください。

## ■①出版白門会ホームページのご案内

アドレスは<http://pub-hakumon.jimdo.com/>です。GoogleやYahooといった検索サイトで「出版白門会」を検索すると上位にヒットしますので、そこからのアクセスも可能です。最新の活動情報などを更新していますので、是非アクセス下さい。

## ②出版白門会事務局へのご連絡は下記メールアドレスをご利用ください。

E-mail:pub.hakumon@gmail.comです。

## ■会費納入のお願い(年会費金額¥5,000)

## ①同封の振込用紙にて、もしくは下記口座へお振込みをお願いいたします。

郵便振替口座記号番号 00180-8-600659

加入者名 中央大学学生会出版白門会

振込用紙がなくても、直接郵便局の窓口やATMでも手続きができます。ゆうちょ銀行の口座をお持ちの方は、ゆうちょダイレクト(パソコン、携帯、スマホなど)もご利用いただけます。

## ②他行(銀行など)からの振込みをされる場合は下記口座をご指定のうえ、手続きして下さい。

ゆうちょ銀行 当座預金

店名(店番) 〇一九(ゼロイチキユウ)

口座番号 0600659

口座名義 チュウオウダイガクガインカイシュツパンハクモンカイ

出版白門会は皆様の会費のみで運営しております。ご協力のほど何卒よろしくお願いいたします。

## 編集後記

… 相変わらず出版業界では厳しい話があちこちで聞かれる。そんな中、電子出版は着実に売り上げを伸ばし、存在感を増している。教育にICTを利活用している自治体も110を超え、生徒全員にタブレットを貸与する自治体も予定を含め6自治体にのぼる。

… 従来の本と電子出版の関係を考える時、精神科医の斎藤環さんが新聞にかつて書いていた以下の文を思い出す。

「私はこれからも、資料や情報としての本は電子書籍のほうを選ぶだろう。しかし、私という人格の一部になるような大切な本は、紙という物質の形で所有し、その背表紙を眺めながら暮らしたい。そう、これは電子か紙かという二者択一の問題ではない」

この問題を考える時、唐突に「廃用症候群」という言葉が思い浮かぶ。被災地の人々の健康状況に関連して、よく出てくる用語だが「人間は持っている機能を使わないと、その機能が低下してしまう」ということだ。紙の本と電子書籍を読む時に、脳の中では別の場所がそれぞれ機能しているような気がする。紙の本を読まなくなっていくことは、その部分の機能が低下していくのではないか。その事による性格や行動の変化は経験的にはなんとなく感じている人も多いと思うが、科学的に証明できないものかと期待している。(丹田)